

# Eternally

八神大輔

やわらかな日差しを受けて、みなもは目を覚ました。  
ゆっくりと目を開けると、冬の高く青い空と 愛しいひ  
との横顔が目に入る。

昨晚のことを思い出して、幸せな気持ちになると同時に、  
恥ずかしくなって布団を目深にかぶり直した。

「ん……」  
その動きに、彼は少し身じろぎしたが、まだ目覚める気配  
はなかった。寝返りを打つと同時に、みなものほうに手を伸  
ばして、その体を抱き寄せた。

「……智也さん……」  
無意識のその動作が、みなもにはとても嬉しかった。幸せ  
で幸せで、涙が出そうになる。

まどろみ続ける智也の胸に頬を寄せて、みなもは目を閉  
じた。

このまま覚めない夢の中にいたかった。

病院のロビーに、頬を打つ硬い音が響いた。

手を振り上げたまま、瞳を涙でいっぱいにする唯笑と、打たれた頬を押さえもせず立ち尽くす智也。

そのままの姿勢で、どれだけの時間が経っただろうか。

「手術中」のランプが、赤く闇を照らしている。

「……どうして……？」

絞り出すような唯笑の声。けれど智也はやはり何も答えず、ただ黙ってうつむいていた。

「どうして、こんなこと……！ どうして、みなもちゃんをひとりにしたの、智ちゃん？ だから、みなもちゃん、こんな無茶を……。どうしてえ……」

唯笑はその場に座り込み、泣き崩れた。それでも智也は何も云うことができなかった。云うべき言葉がなかった。

病院を抜け出してきたみなもを背負って、智也は海に走った。ふたりで約束した、金色の海へ。

みなもは、智也と過ごしたこの一カ月が、いちばん幸せだったと云ってくれた。

しかしそれでも、いやそれだからこそ、智也は自分が許せなかった。

「……お前のせいだと責められたら、どれだけ楽だっただろうか。」

みなもの強さが、想いが、優しさが、それらがすべて自分のせいであつた。智也を打ちのめしていた。

「……智ちゃん、来て」

唯笑は立ち上がると、智也の手を取って歩き出した。智也は引かれるままに歩いた。

唯笑が智也を連れてきたのは、みなもの病室だった。ドアを開けて、智也を促した。

「……見て」

智也はゆっくり病室に入り、息を、飲んだ。

床一面に散らばるスケッチ。それらにはすべて、智也が描かれていた。智也の笑顔だけが。

「これ……は……」

「ひとりの間、ずっとみなもちゃんが描いてたんだよ」

唯笑の言葉に、智也が愕然と振り向いた。唯笑は変わらず瞳を涙でいっぱいにして、智也を正面から見据えた。

「智ちゃんが来てくれないことに、みなもちゃん、何も云わなかった。ただ、智ちゃんの絵を描いてたよ。これが……これが、みなもちゃんの戦いだっただの。ひとりぼっちで……戦って……」

「……」

智也は身をかがめて、スケッチの一枚を拾った。そこにいる笑顔の自分を見つめる。

「俺は……本当に……こんな風に笑っていたか……？」

「彩ちゃんのことばは聞いたよ……。智ちゃんがつらいのもわかる……。でも……でもね、みなもちゃんは戦っていたの！」

「智ちゃんは何をしてたの？」

「そう、俺は逃げていただけだ。」

「彩ちゃんの死と向き合うことから逃げ、みなもの苦しみと向き合うことから逃げ……」

「自分が許せないだなんて、なんていう詭弁だったのだろう。智也の頬を、慚愧の涙が伝った。」

「今こそ、みなものそばにいてやりたかった。ともに笑い、ともに涙し、ともに痛みを分かち合いたかった。」

「……戻ろう、唯笑」

「……え？」

「少しでも、みなものそばにいたい。なんの役に……立ちはしないけど……」

「……うん！」

強く頷く唯笑。病室のドアをそっと閉めて、ふたりは手術

室の前に戻った。

2

静かに眠り続けるみなものそばに座り、智也はその顔をじつと見つめていた。

みなもはどうか一命を取り留めた。しかし、依然、危険な状態であることに変わりはない。医師の言葉が智也の胸に突き刺さっていた。

こうして改めて見ると、本当にみなもは痩せてしまっている。元々小柄ではあったが、その明るさではかなさは感じさせなかったのに、今では触れたら壊れてしまいそうに見える。こんな体で、みなもは戦っていた。

智也はそっと、みなもの手を握った。

(もう……俺は……)

「……ん……」

みなもが目を覚ました。何度か瞬きを繰り返し、ゆっくり智也のほうに面を向ける。

「ごめん、起こしちゃったか」

智也は精一杯優しい笑顔を浮かべた。

みなももまた笑顔を返す。その瞬間、先ほどまではかなさは消え、以前と同じ太陽のような明るさがよみがえった。

「……智也さんだ……」

「うん」

「よかった……。また……逢えたんだ。夢じゃ……ないよね」

「夢じゃないよ」

「金色の海も……」

「ああ、本当にあったさ。みなもが描いてくれた、金色の海……」

「……」

「うん……」

嬉しくて、みなもは涙を流した。智也はその頬を手で包んで、涙をぬぐった。

「これからは……俺がそばにいる」

「……え？」  
「ずっと……そばにいるよ。二度とひとりになんかしない……。約束だ」

「本当に……？」  
みなもは目を大きく見開いた。智也の手を握り返す力が強くなる。

智也は両手でみなもの手を包み、頷いた。

「ああ。片時も離れないよ」

「智也さん……」

大粒の涙が、ぼろぼろとこぼれて落ちた。喜びと希望に頬を染めて。

「でも、それじゃ智也さん、学校に行けないよ」

「いいよ、そんなの」

「ダメだよ。智也さんはみなもの先生なんだから。ちゃんと学校に行って、みなものに勉強教えてくれなきゃ」

「……」

「ね」

「……わかった。みなもがそう云うなら、そうするよ」

「うん」

本当に嬉しそうに頷くみなものに、智也は布団をかけ直してやった。

「まだ休んでいたほうがいい。ゆっくりお休み」

「……うん。智也さんは？」

「云ったる？ そばにいるよ」

「ありがとう、智也さん……。ね、手、握ってて」

「ああ」

みなもはすぐにまた寝息を立て始めた。なんと云っても消耗が激しいのだ。

しかし、智也がそばにいて安心してたのか、その寝顔はとても安らかだった。

智也は涙が出そうになるのを、唇を噛んで耐えた。

みなもがもう一度学校に行けるようになるとは、思えな

かった。勉強を教えても、きっと意味がない。それより少しでも長い時間、みなものそばにいたかった。  
「ただ、みなもがそう望むなら。決して未来に絶望しない。みなもの強さに、応えなくてはならない。」  
(俺は……もう……逃げない)  
みなもの笑顔に、涙に、智也は誓った。

以前のよう、智也は毎日病院に通った。一日あったことを、みなもに話して聞かせる。どんな他愛のない話でも、みなもは楽しそうに聞いていた。

みなもの調子がいいときは、勉強を教えた。みなもはずでに起きあがるのも難しくなっていたので、ほとんど進まなかったが、そのことには、ふたりとも触れなかった。

そんな日々の中、以前と決定的に違っていていることがあった。みなもは、絵を描かなくなっていた。いや、描けなくなっていたのだ。

「……ねえ、智也さん」

「なんだい？」

「絵を……描いてみない？」

「え？」

「絵」

「ええっ？」

「もう、真面目に聞いてよ」

ぷっと頬を膨らませるみなも。その姿の愛らしさに、智也は思わず笑みを漏らした。

「ごめんごめん。でも、俺には絵を描く才能なんかはないよ」

「そんなことないよ。智也さんは、きつと、感じたままを絵にすることが出来る人だと思う。みなもが、教えてあげるから」

「うーん……でも、なんで？」

みなもの熱意にやや驚きながら智也が訊くと、みなもは少し悲しげにうつむいた。

「わたし……もう、筆が持てないの。力が、入らなくて」

「……！」

気づいていたことだったが、みなも自身の口から聞かされると、激しい衝撃が智也の全身を走った。

みなもの生きる糧とさえ云えた、絵を描くこと。それまで

も、みなもから奪われるなんて。

けれどそれでも、みなもは智也のために、笑顔を浮かべた。「だからね、智也さんに描いてほしいの。ふたりで見ても、ふたりで感じたものを、智也さんに残してほしい……。だから……」

「……」

「ダメ……？」

「ダメなもんか。前衛芸術を見せてやるよ」

無理矢理、智也は笑顔を作った。

泣いてはいけなかった。みなもが、笑っているのに。

智也の答えに、みなもは満面の笑顔を浮かべた。

「わあい。じゃあ今日からは、みなもが先生だね」

「はい。よろしくお願いします」

「よろしい。じゃあ、最初の課題は……どうしよっかな……」

小首を傾げてみなもは考えた。しかし、智也はもう決めていた。

「みなもを描くよ」

「……え？」

「みなもを描きたいんだ。いいだろ？」

みなもは一瞬驚いた表情になったあと、再び満面の笑顔で頷いた。

「うん！ 嬉しい！」

みなもの頬を涙が流れる。嬉しいときにだけ、みなもはためらわずに泣いた。

智也は立ち上がって、みなもを抱きしめた。愛しさが込み上げたのと、こらえきれなくなった涙を見せないために。

「……智也さん……？」

「……」

「智也さん……あったかいね……」

智也の胸に顔を埋めて、みなもは微笑んだ。

智也は嗚咽を聞かれぬよう、ただ静かに涙を流した。

それから、智也はみなもに絵を習うのが日課になった。みなもは智也の絵をすべて手放して褒めてしまうので、あまりいい先生とは云えなかったが、智也に才能があったのは確かだったようだ。

それとも、それは想いの強さの成せる業だったのだろうか。いずれにせよ、智也は数日で技巧の基本は覚えてしまい、みなもをモデルにして絵を描き始めた。

同じ趣味を持てたことが何より嬉しかったのか、このところみなもはずっと明るく、体調もよさそうに見えた。このまま、何もかもよい方向に向かうのではないか。そんな期待さえ抱いてしまうほどに。

けれど、智也と一緒に絵を描こうとすると、やはりすぐに疲れて熱を出してしまう。それが現実だった。

そんなある日。智也がいつものようにみなもの絵を描いている病室のドアが、ノックされた。

智也はキャンパスに覆いをかけて、振り返った。

「はい」

「えへへ、こんにちは」

少し開けたドアから首だけを出して、唯笑が笑顔を見せた。

「あ、唯笑ちゃん。来てくれたんだあ」

みなもが喜色を浮かべて声を上げる。智也も微笑んで迎えた。

「何やってんだ。早く入れよ」

「うん……あのね、実は唯笑だけじゃないんだあ」

「……え？」

「……じゃーん」

ドアを押し広げながら、唯笑が病室に入ってくる。その向こうには、三人の女性が立っていた。

「こんにちは」

「お久しぶり」

「……こんにちは」

「かおる……双海さん……小夜美さんまで」

「わあ……皆さん、来てくださったんですか？」

みなもから見れば先輩たちが見舞いに来てくれたということなので、みなもはベッドから体を起こそうとした。

「あ、いいのよ、そのまま」

小夜美が微笑みながら、みなもの体を気遣う。すみませんと咳いて、みなもは横になった。

みんなが座る場所を作るため、智也はイーゼルを片づけた。

「……あ、それが智ちゃんが描いてるってヤツね。見せてよあ」  
唯笑が目ざとくチェックを入れてくる。しかし智也は笑って首を横に振った。

「ダメだ。完成するまでは誰にも見せない」

「けちい」

「そうなのー。わたしにも見せてくれないんだよー。先生に見せないなんて、おかしいよね」

心強い味方を得たことで、ここぞとばかりにみなもも責め立てる。しかしそれでも、智也は絵を見せようとはしなかった。

「まあまあ、いいじゃないの。画伯の絵はあとのお楽しみでこと」

「……」

肩をすくめながら、かおるが場をまとめてくれた。そして、手にしていた紙袋を差し出した。

「退屈してると思ってるさ。差し入れ」

「なんですか？ ……あ、ビデオがいっぱい」

「オススメの映画、選んできたんだよ。全部見たら、また持ってくるから」

「ありがとうございます」

「……あ、私も……」

詩音もまた、同じように紙袋を差し出した。誰もが想像したとおり、たくさんの本が入っている。

「詩音さんも。ありがとうございます」

「読み終えたら、私も、ほかのを持ってきますね」

「……これはなかなかちよっと読み終わらないと思うぞ」

智也でさえ持ち運びには疲れそうなの量を見て、ため息混じりに智也は咳いた。

詩音は不思議そうに、智也を見上げた。

「そうですか？ せいぜい三日分ぐらいだと思ったのですが

……」

「……それは双海さんだけだつて……。で、唯笑は？」

「え？ ああつ、忘れてた！」

智也の言葉に、慌てて唯笑は病室から出た。そして、廊下に置いてあったのだろう、両手で抱えきれないほど大きな花束を持って戻ってきた。

「わあ、綺麗……。ありがとう、唯笑ちゃん」

「えへへ、奮発しちゃった」

「無理すんなよ」

「平気だよ。あ、ここに置くな。あとで花瓶に生けてくる」

唯笑が窓際に花束を置く。そのあと、何となく全員の視線が残るひとり 小夜美に集中した。

「あたし？ あたしは特別に新製品のパンを……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……冗談よ」

バツが悪そうに照れ笑いをしながら、小夜美は鞆から一通の封筒を取り出した。

「あたしは、これ」

みなもにその封筒を差し出す。みなもは手を伸ばしてそ

れを受け取りながら、尋ねた。

「なんですか、これ？」

「旅行のクーポン券よ。元気になったら、智也クンにどっか連れていってもらいなさい」

「……え……」

瞬間

誰もが、言葉を失った。

再び、全員の視線が小夜美に集中する。みなももゆっくりと小夜美を見上げた。

小夜美は屈託なく、微笑んでいた。

そして、みなもも、晴れやかな、笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます！ 嬉しいです。ねえ、どこがいいかな、智也さん」

「え……つと、それは……」

「思いつきおねだりしちやいなさいね」

「はい！」

笑顔のみなもと小夜美をよそに、智也たちは戸惑い気味に互いの視線を見交わした。

\*

しばらく歓談したあと、唯笑たちは帰ることになった。智也はいつも消灯時間ぎりぎりまで残っているので、唯笑たちを病院の玄関まで送りに出た。

「みんな、ありがとう」

「うっん、また来るね」

手を振ってそれぞれが家路につこうとしたとき、かおるが、やはり黙っていられない、という風に口を開いた。

「小夜美さん、さっきのあれは……やっぱり……」

「……かおる」

「でも……」

「……」

「……」



小夜美はかおるには答えず、智也の正面に立った。まっすぐに、強い視線を智也に注いだ。

「智也くん、『最後まで一緒にいてやろう』なんて、考えてちゃダメだよ」

「え……」

どくん、と智也の心臓がはねた。

まさにそのとおりだったからだ。

逃げない、ということとは、そういうことだと思っていた。

小夜美は手を伸ばし、智也の両肩を掴んだ。湯を入れるように、強く智也の体を揺さぶる。

「あなたが信じなくてどうするの！」

「小夜美さん……」

「みなもちゃんは、全然諦めてないよ？ 一所懸命生きてる！ どうしてそれを信じてあげないの！ あなたがみなもちゃんと一緒にいるのは、彼女を看取るため？ 違うでしょう？ 彼女と、生きていくためでしょう！」

「……」

智也を見つめる小夜美の瞳から、涙がこぼれた。

智也もまた涙を流しつつ、何度も何度も頷いた。

そうだ。俺はまた、勝手に諦めていた。もう逃げないと云いながら、諦めてしまうことで、自分を守ろうとしていた。

みなもが望んでいるのは……そんなことじゃないのに……。

「……しっかりしろよ、少年」

智也の頬を軽く叩いて、小夜美は踵を返した。お先に、と云って歩き去る。

その後ろ姿を見送って、かおるが小さくため息をついた。

「……ちえつ。かっこいいね」

「そうですね」

詩音も頷く。唯笑が智也の横に来て、その顔を覗き込んだ。

「さすが小夜美さん、だね」

「……年の功だな」

た。照れ臭そうに涙をぬぐいながら、智也は憎まれ口を叩いた。

「あ、云いつけちゃお」

「勘弁してくれ」

そのときの智也の笑顔に、唯笑は安堵すると同時に、切ない痛みを覚えた。

どうして智ちゃんだけが……と、考えてしまう。一度は逃げ出した智也をなじったけれど、彼の痛みがどれほどのものか、その笑顔を見て初めてわかったような気がする。

しかし、それはもう云ってはいけないうことだ。今、唯笑に云える言葉は、ひとつだけだった。

「じゃあ、唯笑たちも帰るね。……みなもちゃんのこと、よろしくね」

「ああ。ありがとう、みんな、ほんとに」

笑顔で手を振る智也。三人の少女たちは、それぞれの痛みを抱えつつ、帰路についた。

\*

智也が病室に戻ると、みなもは小夜美からもらったクーポン券をじっと見つめていた。

智也のほうに面を向け、小さく微笑む。その笑顔はいつもと違い、少し寂しげだった。

「どうした……？」

「うん……」

うつむいてしまったみなもに近づき、智也はベッドに腰掛けた。みなもの手を握り、クーポン券を同じように見つめた。

「一緒に……行けるかな」

ぽつりと、みなもが呟く。

智也はためらいのない笑顔で答えた。

「もちろんさ。楽しみだな」

「……うん！」

みなもはようやくいつものような笑顔を浮かべた。  
しかしそれも一瞬のことで、すぐ次には真剣な表情で智也を見つめていた。

「智也さん……」

「ん？」

「お願いが……あるの」

「なに？ なんでも聞くよ」

優しく見つめられ、みなもの頬は紅潮した。それでも目はそらさず、じっと智也を見つめながら、かすれた声で囁いた。

「キス……してほしいの」

「……」

智也は微笑んだまま、みなものに顔を近づけた。

みなもの心臓は破裂しそうなほど高鳴り、緊張のあまり目を見開いてしまっていた。

だが、智也の手がそと頬に触れると、そのぬくもりが伝わってくる、嘘のように気持ちがいかに穏やかになり、自然と目を閉じた。

唇が重なる。

触れるだけの優しい口づけに、万感の想いを込めて。

ふたりは今、この世の誰よりも、幸せだった。

けれど運命は、どこまでも残酷だった。

「退院……？」

医師から聞かされたその思いがけない言葉に、智也はつい怪訝そうな表情を作ってしまった。

本来、喜ぶべき話題のはずだ。しかしそれを正直に受け取るには、みなもの担当医の様子はあまりに沈痛だったし、毎日そばにいる智也の目から見ても、まだみなものが病院から出られる状態だとは思えなかった。

「どういう……ことなんですか？」

答えを予想して、智也の背を冷たいものが走った。

病院の入り口で彼と会い、話がある、と呼ばれたときから、嫌な予感がしていたのだ。

医師は軽く頭を振りつつ、重いため息をついた。

「もう、病院で苦しい思いをする必要はない……そういうことだよ」

「だから、それはどういう……！」

思わず立ち上がり、声を荒げてしまう智也。だが静かに見つめ返され、力無く椅子に座り直した。

「……すみません」

「いや……謝らなければいけないのは、こちらのほうだ。本当に申し訳ない」

「……」

「しかし……もう、これ以上は……」

唇を噛んで、医師は沈黙した。

智也は目の前が急に暗くなっていくのを感じた。

いつの間にか廊下に出たのかも、覚えていなかった。一歩歩くことに、信じられないほど力が必要になる。智也はよるめて、壁に手をついた。

「どうして……こんな……！」

泣き崩れそうになる。けれど、智也は耐えた。

みなもの気持ちを考えれば、二度と、こんなところでくじけてはいられなかった。

(彼女と生きていくためでしょうか?)

小夜美の言葉を思い出す。

そう、何があっても諦めないみなものために、智也ができること、それは

智也は頷くと、公衆電話を探した。

\*

智也が病室に戻ったとき、みなもはベッドで上体を起こしていた。智也のほうに振り向き、いつもと同じ笑顔を向ける。けれど目がほんの少し、赤かった

「智也さん！ わたし、退院できるんだって」

「ああ、俺も聞いたよ。よかったな、みなも」「うん！」

みなも自身、その意味はわかっていたはずだった。しかしそれでもみなもは笑顔を崩さなかったし、智也も穏やかに笑顔を返した。

「すぐには学校には行けないけど、お家なら、智也さんともっと一緒にいられるよね。そうだ、家に泊まれるよう、お母さんをお願いしてみる！ それでね、……」

「みなも」

「はしゃいだ風にしゃべり続けるみなもを、智也は静かに遮った。そして、優しく微笑みながら、云った。

「旅行、行こうか」

「……え……」

驚き、戸惑い、不安、様々な感情が一瞬のうちにみなもの表情を駆け抜けた。しかし、最後はやはり、喜びに満ちた笑顔だった。

「ほんと？ ほんとに智也さん、連れてってくれるの？」  
「ああ」

「いつ？」

「今すぐだ」

「今……すぐ……？」

「そうだ」

云いながら、智也はみなもを抱き上げた。驚くみなもに笑顔で言葉を続ける。

「嫌だと云っても、さらっていく」

「智也さん……」

見開いたみなもの目から、涙があふれた。智也の首に腕を回し、みなもはきつく抱きしめた。

「うん……行こう、智也さん。連れてって……一緒に……」  
「ああ……ずっと……一緒に……」

カーテンを開けると、蒼い海が広がっていた。西に傾いた太陽の光を受け、海面がきらきらと光っている。もうしばらくすれば、夕焼けの色に染まるはずだった。

「わぁ……海だ、海が見えるよ、智也さん」

みなもは智也に振り返り、満面の笑みを浮かべた。

智也も笑顔でみなもの隣に立ち、その肩を抱いた。

「いいとこだろ？」

「うんっ！ 智也さん、すごいね。こんな素敵なペンション、知ってるなんて」

「みなもとと一緒にここへ来て調べてたからな」

「……」

すでに喜びを表現する言葉もないように、みなもは黙って智也の胸に寄り添った。智也はみなもの体をそっと抱きしめた。

ふたりは海の近くのペンションにいた。

シーズンオフなので、ほかに宿泊客はいない。そもそも冬は営業していなかったのだが、智也が頼み込んで泊めてもらった。いかにも訳ありそうなのを見て、しかし初老のオーナーは何も云わずに部屋を用意してくれた。

「今日はもう冷えてきたから……明日、海に行ってみようか」「うん」

みなもが頷いたとき、部屋のドアがノックされた。智也が返事をする、ドアを開けてオーナーが顔を出した。

「食事は七時でいいかね」

「え……」

無理を云って開けてもらったので、泊めてくれるだけで構わないと云っておいたはずだった。それに、みなもはもう十分食事を取ることできない状態だった。

「いえ、食事は……」

「せっかくそんな可愛い子と旅行に来て、食事がコンビニ弁当では台無しじゃろ」

オーナーが人のいい笑顔を見せる。その言葉にみなも小さく微笑んだ。

「ここに来てくれた人には、いい思い出だけを持って帰ってほしい。遠慮せんでええ」

「……智也さん」

みなもが智也の顔を見上げる。智也も笑顔で頷いた。

「ありがとうございます。いただきます」

オーナーは何度も頷きながらドアを閉めた。

みなもはもう涙ぐんでいた。

「……いい人だね」

「そうだな」

「みんな……みんな、みなもによくしてくれる……なのに……」

「え？」

「……ううん、何でもない。ご飯、楽しみだね」

笑顔の瞬間に浮かべた憂い。それに気づいていたが、智也は無理に聞き出そうとはしなかった。

「飯の時間まで、絵、描いててもいいかな？ もう少しで完成なんだ」

「ほんと？ 楽しみっ」

みなもがベッドに腰掛ける。智也はキャンパスを取り出し、みなもを見つめながら絵を描き始めた。

窓から差し込む光が、みなもの髪を金色に縁取った。

\*

夕食はフランス料理を中心としたコースだった。

みなもは小食ではあったが、ここ最近ではなかったぐらい食が進んだ。智也はオーナーに「今日は特別だ」とワインを勧められ、赤い顔をしていた。

終始、誰もが笑顔のままで、時は過ぎた。

部屋に戻ると、智也はベッドに体を投げ出して大きく息を吐いた。

「はーっ、食った食った」

「智也さん、食べ過ぎ。みなもの分まで食べちゃうんだもん」

「だって、すごいうまかったじゃん」

「それはそうだけど」

笑いながら、みなもはまた窓のそばに立った。月光を照り返す、暗い海を見つめる。

「……夜の海だよ、智也さん」

「……うん？」

静かな物言いにふと不安を感じ、智也は起きあがった。みなものそばまで歩き、昼と同じように肩を抱く。みなもも同じように寄り添ってきた。

「夜の海。また一緒に、見られたね」

「そうだな……」

あの夜のことを思い出すと、智也は胸が激しく痛んだ。

あんな無茶をさせなければ、みなもの容態は悪くならなかったかもしれない。

繰り返言だと、わかっていたけれど。

智也は背中からみなもを抱きしめた。壊れないように優しく。どこにも行かないように強く。

みなもは静かに目を閉じた。

「お母さんたち、心配してるかな」

「そうだな……」

手紙は、残してきていた。「智也さんと一緒に行きます」そう一言だけ。

「だけど、きつとわかってくれるよ」

みなもは目を開いて、智也を見上げた。智也は微笑みつつ、少し悲しげな顔をした。

「ああ……。だけど俺は……。ひどい奴だな……」

「どうして……？」

不安を面に出して、みなもが智也にすがりつく。智也は安心させるように、みなもの頬を手で包んだ。

「みなものお父さんもお母さんも……。唯笑たちも……。みなもを愛しているすべての人たちから、俺はみなもを奪ってきた……。俺が、片時も……。みなもと離れたくなかったから……」

「……」

「智也さん……」

みなもの瞳から流れた涙が、智也の指を濡らした。

みなもは大きくかぶりを振った。

「違うよ、智也さん。わたしが望んだの。智也さんと一緒にいたいって。智也さんは、わたしの願いを叶えてくれただけ」

「みなも……」

「嬉しかったよ。幸せだった。こんなに幸せで……。なのに……」

「みなも……？」

みなもは泣き崩れていた。

これまで、みなもは嬉しいときにだけ泣いた。どんなに悲しいときでもつらいときでも笑顔を見せた。

けれど今夜だけは、あふれる想いを止められなかった。

「みなもは……。何も残せない……。！ 智也さんも……。お父さんもお母さんも……。唯笑ちゃんたちも……。みんなみんな、とつても優しくしてくれるのに……。みなもを……。幸せにしてくれるのに……。みなもは……。智也さんたちの心に、悲しみを残していくだけ……。そんなの……。そんなの……」

智也の胸に、涙のしみが広がった。

智也はみなもの髪を慈しむように何度も何度も撫でながら、囁いた。

「みなも……。云ってくれたよな。俺といた一カ月が、いちばん幸せだったって……」

「うん……」

「俺も……同じだ」

みなもがゆっくりと面を上げた。瞳からは、涙がこぼれ続ける。

「俺も……。同じだ」

智也はその涙をぬぐい、髪を撫で続けた。俺は、ここに  
いる。そのことを伝えようとするように。

「みなもがくれたのは、笑顔と幸せだ。それだけだ」

「智也さん……」

みなもの涙は止まらなかつた。けれど、そこにあるのは笑  
顔だけだつた。

智也がみなもに口づける。長く、優しく。  
誓いのキスだつた。

7

目蓋を開けると、智也と目が合った。

微笑んで見つめているその視線に、幸せと、そしてやはり  
恥ずかしさを覚えて、みなもは布団で顔を隠した。

「おはよ」

「……おはよう、智也さん。見てたの？」

「ああ」

「起こしてくればよかったのに」

「あんまり寝顔が可愛かつたからな」

「もう……意地悪」

すっかり布団の中に潜ってしまったみなも。智也は笑いな  
がら、布団ごとみなもを抱きしめた。

「今日もいい天気だよ。飯食ったら、海に行こうか」

「……うん！」

布団から顔を出して、みなもは頷いた。

窓から差し込む日差しと同じぐらい、暖かな笑顔だつた。

\*

海岸線を、ふたりはゆっくりと歩いてた。

時折吹き抜ける北風からみなもを守るように、智也はそ  
の肩を抱いていた。みなももびったりと智也に寄り添ってい  
た。

「寒くないか？」

「うん……平気」

そんなやりとりのあと、ふたりはまた黙って歩く。ただふ  
たりでいらればよかった。

キャンパスの入った大きなバッグを、智也は肩に提げていた。  
もう少して絵は完成する。その仕上げをこの海でするつもり  
だつた。

「この辺でいいかな」

「うん」

「疲れるなら、座っててもいいよ」

「ううん……平気だよ」

惜しそうに智也はみなもの肩から手を外し、数歩下がった場所に座った。キャンバスを取り出し、絵の準備を始める。みなものは微笑みながらその様子を見ていた。

やがて智也が顔を上げ、絵を描き始めた。

みなものは笑顔のまま、モデルを務め続ける。

冬の海を背景に立つその姿はとても愛らしく、夢のように、美しかった。

時々、とりとめのない会話を交わす。みなものは波打ち際に入って水の冷たさに歓声を上げたり、砂で子供のように山を作ったりしていた。

ただ笑顔だけが、ふたりの間にあった。

やがて陽が西に沈みかけた頃。砂浜に腰掛けて、赤い夕日をじっと見つめていたみなもの横顔に、智也が声をかけた。

「……できたよ」

「ほんと？」

みなものは弾かれたように立ち上がり、智也のもとへ駆け寄ってきた。これまでずっと秘密にされていた絵だ。完成の時をみなものは心待ちにしていた。

智也の隣に座り、みなものはキャンバスを覗き込んだ。そして

小さく、息を飲んだ。

そこには、笑顔のみなもがいた。太陽のように暖かく、優しく、愛しいひとを包み込む笑顔で。

みなもの瞳から、涙がこぼれた。

「これが……わたし……？」

「ああ」

「わたし……こんな風に笑ってた……？ 智也さんの前で……こんな風に……笑ってた……？」

「ああ。いつもみなものは、こうして笑ってくれてた。どんなと

きも……」

「智也さん……」

みなものは智也の肩に頭を寄せ、泣き続けた。その面はやはり、笑顔のまま。

「嬉しい……ありがとう、智也さん……」

「……」

「智也さん……わたし……智也さんに逢えて……よかった……。智也さんに逢えて……ほんとにほんとに……幸せだったよ……」

「……ああ」

「ほんとに……しあわせ……」

「ああ。俺だってそうさ。みなものに逢えて……みなもを愛して……よかった……」

「……ありがとう……」

みなもの目がゆっくりと閉じられてゆく。

智也はみなもの肩に手を回して、その体を支えた。

「……眠ったのかい、みなも？」

「……」

智也の頬にも、涙が一雫、伝った。

epilogue

智也は自分の部屋のベッドに腰掛け、壁にかけた絵を見ていた。

智也とみなもが、微笑んでいる。

みなもが描いてくれた智也の絵と、智也が描いたみなもの絵。そのふたつが並んでかけられていた。

その笑顔はどうやっても悲しみとは結びつかなかった。だから智也は、小さく笑みを浮かべたままその絵を見つめていた。

そのとき、ノックの音に続いて、ドアが開いた。

「どうしたの？」

「ああ、悪い。……すぐ行くよ」

智也は立ち上がって、ドアへ向かった。

部屋を出る前に、もう一度振り返って絵に笑いかける。そして、静かにドアを閉めた。

Memories Off  
Scenario for  
MINAMO IBUKI  
"Eternally"  
end



## あとがき

「Eternity」じゃなくて「Eternally」です。ヒツキーですね。  
タイトルから、彩花ものを想像された方、ごめんなさい。  
みなもシナリオの不満点を上げるとすれば、やはり智也が  
不甲斐ないことでしょう。もちろん、気持ちはわかります。  
自分が同じ状況になったら、たぶん壊れると思う。  
だけどそれでも、あれじゃみなもが可哀想だと思うのです。  
やっぱ智也にはみなもを迎えに行ってほしかった。というの  
が、このお話を作った発端です。  
しかし、今度もまた自分の力不足を思い知る結果となりま  
した(涙)。  
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一・四・二一

八神大輔